

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：11501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590185

研究課題名(和文) 地域における 学び を記述分析する質的研究の構築 社会教育研究の継承と革新

研究課題名(英文) The construction of the qualitative research to describe and analyze aspects of the learning in the community in the field of adult and community education in Japan

研究代表者

安藤 耕己 (ANDO, Koki)

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号：30375448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：まず第1に、質的研究に関する人文・社会科学の今日的動向をふまえて、「社会教育研究の方法論」に関する議論と到達点を整理・検証することで、社会教育研究の先駆性および課題を検討した。第2に、社会教育実践や現場を取り巻く状況の不確実性や困難が拡大するなか、社会教育の理論と実践や現場との関係を再考しながら、実践や現場と対話的に研究する方法や課題を考察した。第3に、そのなかでも特に、ナラティブに注目して、社会教育の実践や研究方法をとらえ直すことで、実践や研究の方法や枠組みに関する新たな知見や課題を示した。

研究成果の概要(英文)：As a result, in this study shows the follows;
(1)We examined the pioneer spirits of the study on adult and community education and a problem standing on the contemporary trend of the humanities, the social science about the qualitative study by inspecting a discussion and achievement about the methodology of the study on adult and community education. (2)We reconsidered theories of the adult and community education and the relations with practice, the learning scene, and considered the interactive method of research on the practices. (3)We showed the new knowledge and problem about the method of practice and the study of the adult and community education by paying attention to the narrative method.

研究分野：社会教育学

キーワード：ナラティブ ライフストーリー ライフヒストリー 質的研究 現場参加型研究

1. 研究開始当初の背景

戦後社会教育の実践では、1950年代半ばの青年団による共同学習運動を端緒とし、小集団で「話しあうこと」「記録すること」「ふりかえること」を基盤とした学習活動が展開し、そのことが社会教育固有の学習方法としても位置づけられてきた。そこでは、研究者は現場に深くコミットし、実践の発展に大きな役割と責任を果たしてきた。今日でいうナラティブ(語り・物語)に着目した教育方法と実践分析の先駆けであり、現場共同探求型のアクション・リサーチの成果が蓄積されてきたのである。しかし、当時、それは自明視されてきたがゆえに、言語化・精緻化されず、方法論として継承されてこなかった。

他方、若手研究者の多くは、生活困窮者の自立支援、市民活動、地域福祉、まちづくり等、地域における多様な「学び」を対象としている。相対的に公的社会教育の位置づけが低下する中で、共通する実践を媒介とし、研究方法を身体レベルで年輩研究者から学ぶ機会が失われてしまった。

そうした中で、若手研究者の多くが、現場を記述分析するために社会学や心理学等の質的研究を参考に、研究の方法や技法を模索している状況にある。それは二重の意味で不幸なことである。一つには、借り物の方法論を周回遅れで援用するようでは、社会教育研究者の学的アイデンティティを消滅させる。他方には、質的研究の今日的潮流からみて先駆性に満ちた社会教育「的」な研究スタイルが蓄積してきたことが共有されることなく忘れられてしまうことは、学的営み全体とって大きな知的損失となる。

2. 研究の目的

本研究は、地域における「学び」を記述分析する質的研究を確立することを目的とする。具体的には、これまで社会教育「的」研究として大事にされてきた現場との関係のあり方や方法的な視座を改めて今日的な質的研究の潮流の中に位置づけ直す営みを、学界内で世代を超えた共同探求作業として行う。その際、実践を語る「ことば」の豊富化と精緻化をめざして、実践のなかの「ことば」の力動性をどう表現するのかを含めて検討を加える。

本研究の成果と意義は、第一に、学的アイデンティティが再確認されることで、社会教育研究が質量ともに向上することにある。これまで査読論文として通過しづらかったがゆえに敬遠されがちな現場の「今」を対象とした学習過程分析がメインストリームとして位置づくことになる。そのことは、第二に、社会教育実践の発展に大きく寄与することになる。現場の「今」を語る「ことば」を精緻化していくことで、再帰的に実践の定性的評価の深化をもたらす。第三に、それにより地域における「学び」は、より高次のレベルに底上げされることが期待できる。さらに第四に、

本研究の完成は、臨床的な社会科学全体への波及あるいは影響が期待される。

3. 研究の方法

これまでの社会教育研究を今日的な質的研究の潮流と対話させることにより、そのエッセンスを批判的に継承し、方法論としての革新をめざす。そのために、本研究の定例研究会を知と情報が結節するサロンのような対話的公共空間として位置づけ実施する。

具体的には研究会において、戦後社会教育実践の検討、従来の社会教育研究の方法論の収集と整理、研究プロセスを開示した同一実践の共同探求、近接領域の方法論に関する議論との比較検討、の4点の成果を持ち寄り議論するものとする。くわえて、日本社会教育学会のプロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」と連動させ、六月集会および9月研究大会でシンポジウムを実施することで、定例研究会で検討された内容の深化と共有をめざす。

また、定例研究会の開放性を高めるために、メーリングリストおよび関連サイトの設置、研究会の様子をインターネットで動画配信する。

4. 研究成果

最終的に、本研究の成果は主に以下の3点に集約される。まず第1に、質的研究に留まらず、量的研究をも含め、人文・社会科学の今日的動向をふまえつつ、「社会教育研究の方法論」に関する議論と到達点を整理・検証することで、社会教育研究の先駆性および課題を検討できたことである。第2に、社会教育実践や現場を取り巻く状況の不確実性や困難が拡大するなか、社会教育の理論と実践や現場との関係を再考しながら、実践や現場と対話的に研究する際の方法や課題を考察した。第3に、そのなかでも特に、ナラティブに注目して、社会教育の実践や研究方法をとらえ直すことで、実践や研究の方法や枠組みに関する新たな知見や課題を示した。

第1の成果は主に日本社会教育学会2014年六月集会シンポジウム「社会教育研究における方法論の位置『量』対『質』を超えて」においてレビューを行い、また2015年9月に実施された日本社会教育学会第62回研究大会でのシンポジウム「社会教育研究における継承と革新」等において示された。1つには、これまで学会として質的研究法を含め、方法論をめぐる議論が十分になされてこなかったことが確認された。もう1つには、方法論の議論について、社会教育研究の固有性を問うことと不即不離であるとして、社会教育学という学問の世界観やパラダイムそれ自体を相対化し問い直していく議論と同時に検討は展開した。

第2、第3の成果は、主に2014年9月実施の日本社会教育学会第61回研究大会シンポジウム「社会教育実践における「ことば」

とその力動性」などを経て確認された。その際、特に次のような論点が提示され議論が進められてきた。

まず、研究者の役割や立場性である。例えば、研究者と実践者との非対称的な関係性の問題、研究者としての再帰的な自己の分析や関与の問題、研究者と調査協力者との相互変容の問題、研究者としての社会的責任やアウトプットの質の問題、さらには規範的・客観的な知識ではなく「目の前にある真実」をどのように把握するのかという「知」そのものの問題といったことも議論されてきた。また、近年の学会誌掲載論文が歴史論文に偏る傾向があり、アカデミズムと現場のニーズとの乖離についても指摘されてきた。

次に、実践や学習の把握に関わる議論である。例えば、学習や実践をめぐる表象の暴力の問題、モデルストーリーとドミナントストーリーとの緊張関係といった学習過程の動的な描写の問題、あるいは分析のエビデンスそのものをどのように把握するのかなどの論点が提起されてきた。また、実践の場を伝え、ときにその場の規定もし、アカデミズムと生活世界をも架橋することばの力動性に着目する議論もなされた。これらの議論をとおして、ある枠組みや研究者のフィルターを通しての優良事例や解釈の権限が研究者に独占されるのではなく、エビデンスを細かに示しつつ、解釈自体が学習者/実践者/研究者の相互交流・越境・再帰性によりなされていく態度に可能性が見出された。さらに、マルチメソッドあるいはトライアングュレーション（混合法）の必要性も認識されることになった。

これらの議論を認識しつつ、2015年日本社会教育学会六月集会シンポジウム「社会教育研究方法の新たな挑戦」では、自治体レベルでの政策提言に資するフィールドワークからの理論化を図る研究、野外体験活動の評価における質的研究の意義、丁寧な一次資料の発見・分析から歴史的事実を再構築する社会教育実践史研究などの若手研究者の試みが示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

安藤耕己、本プロジェクトの成果と可能性および課題、社会教育学研究、査読無、52-1、2016、83-84

荻野亮吾、社会教育とコミュニティの構築に関する研究方法の検討：社会関係資本論に基づくアプローチ、社会教育学研究、査読無、52-1、2016、55-57

岩本陽二、棚田洋平、添田祥史、東アジアと日本の識字教育の20年、東アジア社会教育研究、査読無、20、2015、pp.39-48

添田祥史、自治体職員のライフヒストリーと社会教育学研究 『釧路市の生活保護行政と福祉職・櫛部武俊』を読む、査読無、10巻、2015、p.10

添田祥史、識字実践がつくるノをつくることば、社会教育学研究、査読無、51-1、2015、pp.30-31

藤田美佳、結婚移住女性に対する韓国語教育の課題 「多文化」か「同化」か、東アジア社会教育研究、査読無、19、2014、pp.126-136

〔学会発表〕(計10件)

藤田美佳、東日本震災をきっかけとした防災と外国人の地域参加 浜松、気仙沼、秋田の取り組みを踏まえて、日本社会教育学会・韓国平生教育学会第7回日韓学術交流大会、2015年10月18日、韓国・済州大学

荻野亮吾、社会教育を通じたコミュニティの構築過程：長野県飯田市における分館活動の事例研究から、日本質的心理学会第12回大会（一般公開シンポジウム「コミュニティを紡ぐ学習をどう捉えるのか？」日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」から）、2015年10月4日、宮城教育大学

藤田美佳、「生活者としての外国人」と共に作る多文化社会 秋田県「のしる日本語学習会」の取り組みを通じて考える社会教育の役割、日本質的心理学会第12回大会（一般公開シンポジウム「コミュニティを紡ぐ学習をどう捉えるのか？」日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」から）、2015年10月4日、宮城教育大学

松本大、社会教育実践に関する質的研究の課題、日本質的心理学会第12回大会（一般公開シンポジウム「コミュニティを紡ぐ学習をどう捉えるのか？」日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」から）、2015年10月4日、宮城教育大学

安藤耕己、本プロジェクトの成果と可能性および課題、日本社会教育学会第62回研究大会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」シンポジウム：「社会教育研究方法における継承と革新」、2015年9月20日、首都大学東京

添田祥史、北九州における夜間中学校増設運動の展開、日本社会教育学会第62回研究大会自由研究発表、2015年9月19日、首都大学東京

荻野亮吾、社会教育とコミュニティの構築に関する研究方法の検討：社会関係資本論に基づくアプローチ、2015年度日本社会教育学会六月集会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」シンポジウム：「社会教育研究方法の新たな挑戦」、2015年6月7日、立教大学

松本大、日本における社会教育職員の生き方 社会的排除に抵抗した職員のライフヒストリー、第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム、2014年12月4日、フランス・リール第3大学

安藤耕己、成人教育への民俗学的アプローチ 「日常」から学習を問う視点、第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム、2014年12月4日、フランス・リール第3大学

添田祥史、識字実践がつくるノをつくることば、日本社会教育学会第61回研究大会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」シンポジウム：「社会教育実践におけることばとその力動性」、2014年9月28日、福井大学

〔図書〕(計1件)

辻浩、片岡了編著、添田祥史分担執筆、国土社、自治の力を育む社会教育計画 人が育ち、地域が変わるために、2014、219

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 耕己 (ANDO, Koki)
山形大学・地域教育文化学部・准教授
研究者番号：30375448

(2) 研究分担者

松本 大 (MATSUMOTO, Dai)
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：50550176

添田 祥史 (SOEDA, Yoshifumi)
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：80531087

藤田 美佳 (FUJIIITA, Mika)
奈良教育大学・教育学部・特任准教授
研究者番号：90449364

(3) 連携研究者

荻野 亮吾 (OGINO, Ryougo)
東京大学・高齢社会総合研究機構
・特任助教
研究者番号：50609948

吉田 正純 (YOSHIDA, Masazumi)
京都聖母女学院短期大学・児童教育学科・講師

研究者番号：30547378

(4) 研究協力者

竹淵 真由 (TAKEBUCHI, Mayu)
下諏訪町教育委員会教育子ども課・子育て支援係・主任

相良 好美 (SAGARA, Yoshimi)
東京大学大学院教育学研究科